

転換の境地そのものである。彼の宗教の本質構造論では、宗教的信における超越と生の根柢の認識が密接不可分に連関しているのである。

危機の体験と死生観の形成

——現代日本におけるキリスト教理解——

中村 信博

まず、事例として佐原英一牧師（一九四四—二〇〇八年・日本基督教団京都葵教会）の実践的な牧会とその背景および影響について紹介する。次いで、ドイツ敬虔主義が近代プロテスタント史において果たした役割について言及し、佐原牧師に類型化される現代日本におけるキリスト教が、ドイツ敬虔主義の背景とそれがおよぼした影響に通底する特質を備えながら展開してきたものであることを明らかにする。これによって、現代日本におけるキリスト教は多くの先行研究が論じてきた神学者や特定の聖職者の信仰理解に匹敵する死生観を内在しながら、いわば多くの無名の信仰者によって形成されてきたものであることを実証と仮説とによって論じる。

日本基督教団京都葵教会におけるおよそ三〇年におよぶ佐原牧師の牧会は、ほぼ一〇年周期で初期、中期、晩期に区分することができる。一貫して「悲しみを負うひとびと」を視野においた牧会活動であった。もちろん、この事実が、聖書の隣人愛の実践や、イエス・キリストの十字架における苦難を根柢とした、牧師として当然の働きであったと推論することも可能であろう。けれども、「心臓病の子どもを守る京都父母の会」との

共同による「パンダ園」（自主保育施設）を教会内に設置したことや、多くの青年、信徒たちに私生活を投げ出すようにして継続された牧会活動によって影響を受けた者は、質と量において群を抜いているとされる。

その背景には、佐原牧師の際だった終末論的信仰が指摘されるべきだろう。若い日に幼い次男を失った経験は、イエス・キリストの苦難についてだけではなく、「悲しみを負うひとびと」との距離を近くし、宣教論の内実を「共感」という精神行為に変えたのではないかとおもわれる。佐原牧師がめざした牧師像は、困難の途上にあるひとびとに同伴者として沿い続けることであり、また、牧師として教会を「悲しみと困難の共同体」として形成することにあつた。それはまた、狭義での信仰の有無にとらわれない、一般社会と境界のない（越境的）教会の姿をも提示している。いっぽうで、それを徹底すれば、教会共同体を非聖域化してしまうのではないかとの批判にさらされかねないものでもあつた。

とくに神学的著作を残さなかったひとりの牧師の営為は、体験的で偶発的なものに過ぎないのだろうか。そこに内在するキリスト教理解の理論を抽出することは不可能なのか。本発題においては、佐原牧師の牧会活動に直接影響があつたとはおもわれないドイツ敬虔主義の成立事情とその背景について比較論的に一瞥することで、この点を理解するための一助を得ることができるかと仮定した。

知られているように、ドイツ敬虔主義は、F・シュペーナーによる家庭での集会（*collegia pietatis*）を起源とし、近代プ

ロテスタント史においては「もうひとつの近代への系譜」と位置づけられている。その古プロテスタンティズムへの異議申し立ては、K・バルトラの危機（弁証法）神学やメソジスト運動など、今日もなおその影響を確認される。

無名とも言えるひとびとの現代日本におけるキリスト教的実践とドイツ敬虔主義に共通するものは何か。そこには、私的危機感の体験が生み出す共同体が姿を見せる。神学や教義ではない「危機の体験」は、信仰者と非信仰者とを区分しない。万人に共通する「悲しみ」は、教会共同体の外にいる他者をたんに宣教の対象とするのではなく、共同体を越境して形成される倫理の対象、すなわち「隣人」として理解することを可能とするのである。

キリスト教的「死生観」は「私」と「教会」をも越境して「共感的共同体」を拓く可能性をもっている。今後、脱構築的实践に潜む信仰論理の検討がいつそう必要とされるだろう。

ムカツラフ（能力者）概念をめぐる信仰告白表明と審判

四戸 潤弥

複数の宗教を死生観という側面から探るには、信徒、非信徒を問わず人間が主体となり、動態的に特定宗教との関係を問うことが一つの方法と考えることができる。唯一神教の系譜であるイスラームの場合、創造主、全能者である唯一神アッラーの慈悲に感謝し、最後の審判の裁きの日に、現世でのアッラーへの信仰と、その信仰が命じた義務と禁止に関わる教義の実践が問われ、天国、あるいは業火の運命の裁きを受けるとされる人

間が、結局のところアッラーの慈悲と許しに縋る他に術がない状況を伝える聖典『クルアーン』、かつ運命は生まれる時にすでに定まって（書かれて）いるとされる預言者のハディースを根拠とした教義において、先に述べた死生観の軸となる人間の主体性を見出すことは頗る難しい。ゆえに同じ唯一神教であるユダヤ教がユダヤの民の過酷な民族の運命の歴史的現実を契機として信徒の規律を重視する教義と実践と、またキリスト教が主イエスの十字架を通じて、神とのかかわりを主体的に意識する教義と実践との比較においてイスラームには信徒の主体的宗教への働きかけが、殊更、意識されないようにも見えるのは、アッラーにすべてを委ねる（タワククル）の概念が、主体性を喪失したような「アッラーに絶対服従」と表現されてきたことがその原因であるようにも思える。しかしながら、「信仰の甘美さ」を論じたハディースに出会う時、人はイスラーム信仰において、個としての人間の全能のアッラーに対する主体的働きかけをはっきりと見出すことができるのである。「信仰の甘美さ」とは簡単に言えば、本能に従い自由奔放に生きる人間にとって、その統御が必要とされる戒律を伴う信仰に生きるかを問いかけられた時。そこに拒否か、信仰かの二者択一の主体的選択があることが自覚され、拒否も可能だったにも関わらず信仰を選択した行為は、知性（アクル）の行為の選択であり、そしてその知性の働きは、日常の社会生活において行為の責任を問われる法的「能力者」であってはじめて行えるものであると言うことである。それはまた、イスラームという宗教の義務と禁止の戒律の実践の行為責任を最後の審判の日に問われることも